の喜びの中でも、その小さからぬ一つであつたであらうと思ふ。上に略述したやうな經路を辿つて、長い時間と深い心勞とを費された結果であることを思へば、誠に滿悅の極もさこそと推察し得られるのであつた。

併しながら研究所に關する博士の費神は、實にこの以後に於て益々多きを加へたことゝ思ふ。かくして作り上げられた研究所をして、眞に學術研究の意義に徹する所たらしめ、一路向上の途を辿らしめようと不斷の苦心を拂はれた有樣は、自分の語るまでもなく多くの人の知るところである。その苦心の甲斐あつて、三たび所長の任を重ねられる間に、研究所の聲譽は高く內外に揚がることになつた。これこそ開所當初の喜びにもまさる喜びとして、謙讓なる博士の獨りで滿悅してゐられたところに違ない。

（東光第五號、昭和二十三年四月）

ラードロフ博士

ワシリー、ワシリエウイッチュ、ラードロフ博士は一八三七年一月五日――佛のレミュザーが死んでから五年目、サシーが死ぬる一年前、獨のクロプロートの死後二年目――伯林に生れた人で、もとの名はフリードリッヒ、ウヰルヘルムといふた。東洋學殊にトルコ學者として今日學界の重鎭たるに至つた迄の經歷を略述すると（主として博士の高弟サモイロ、ローウキッチュ氏の「トルコ學者としてのラードロフ」といふ一篇に據る）、